



手作りのタイ王国との交流

ながさわ かずや
 県立神戸北高等学校 校長 長澤 和弥

1 コロナ禍のため内容変更

私がこの記事を書かせていただけることが決まったのは、令和2年になったばかりの頃であり、当時は「コロナ前」であった。

その時には、令和2年度に実施予定であった、本校がタイを訪れる交流活動について寄稿するつもりであった。しかし、ご存じのとおりの世界情勢となり、「海外交流」など望むべくもない状況となってしまった。

したがって、内容変更を余儀なくされ、令和元年度の、タイ王国が本校を訪問したときの交流活動について書かせていただくことになる。この点どうかご了承いただきたい。

なお、令和元年度に始めたばかりのこのタイ王国との交流は、これでなくなってしまうわけでは決してない。交流相手校とは既に強い絆が生まれており、世の中が元に戻れば、必ず再開するものである。



タイからの訪問団と本校生

2 全てはLINEから始まった

前任校に勤務していた平成30年10月25日(木)朝7時前、私は通勤電車の中から、タイ王国のTaraporn Promkotタラポーン・プロムコット校長先生(以下「タラポーン校長

先生」)にLINEを送った。英語で「ぼくたちの学校の間で交流を始めませんか」と。

何と驚いたことに、1分も経たないうちに即OKの返事が返ってきた。そして、奇しくもぴったり1年後の令和元年10月24日(木)、彼女を含めたタイ王国の教員と生徒計9名が、私の学校を訪れてくれたのである。

彼女とは、私が県立川西明峰高校で勤務していた平成26年10月22日から3日間、彼女の学校の生徒を受け入れたことがきっかけで、「LINE交換」をしていたのであった。

二人とも元英語教員なので、英語で直に話せる。彼女が帰国後もしばらくは、日常のできごとについてLINEで話していたが、そのうち、没交渉となってしまっていた。

タイは日本と同様にLINEの普及率が高い国である。国によっては別のアプリが普及していることも多いが、同じアプリで交流できることは、その後も大きな利点となった。

「ダメ元」のLINEメッセージから始まってトントン拍子に話は進み、翌年の平成31年1月頃には、タイ側が、同年秋に日本を訪問する具体的な計画ができあがった。しかし、諸般の事情で前任校では、受け入れを見送ることになったのであった。

3 県立神戸北高校での取組

その後4月に現任校、県立神戸北高校に異動となった。前任校で見送ることとなった受け入れを、何とか実現したいと思ったが、神戸北高校はそれまで、「国際交流」の経験がない高校であった。

私は、まだ全教職員の名前と顔が一致しない赴任1週目から、「タイ王国受け入れ」に

向けて動いた。まずは、幹部教員を呼んで私の考えを聞いてもらったが、大きな課題が二つあると考えていた。

- ・教職員の理解を得られるか。
「この高校で国際交流など無理だ」と言われてしまうのではないか。
- ・生徒たちは関心を示してくれるか。
5名受け入れるため、少なくとも5軒のホストファミリー候補が必要であった。

結果から言うと、両方とも完全な杞憂であった。私自身、昔のイメージを持ったままであったと思う。今の神戸北高校は、昔とは違っていた。教員の中にも推進派が多かった。

国際交流などしたことがなかった高校で、校長として赴任した年度の10月にタイの生徒を約1週間受け入れる。これは、大変無謀なことであったのかも知れない。

しかし現実には、教職員も生徒たちも、想像していた何倍もよく動いてくれ、「大成功であった」と断言できる。タイ側も喜んでくれた。「やってよかった」の一言に尽きる。

特に、生徒たちの素直でフレンドリーな対応にはかなり驚いた。英語の教員として「国際交流」を何度も手がけたことがある私でも、大変新鮮であった。そのような「神戸北高生の良さ」を赴任して間がない頃には、私はまだ知らなかったのであった。

4 令和元年度のタイからの訪問

MOU*教育交流提携書を取り交わしたのは、バンコク郊外にあるSriboonyanon Schoolシーブーンヤノン学校という、日本でいうと6年制の中等教育学校である。2千人ほどの生徒のうち、約80名が日本語を学んでおり、それが、タラポーン校長先生が日本の高校との交流を実現させたかった理由である。

令和元年10月24日（木）～29日（火）までの4泊5日で本校を訪問してくれたのは、タラポーン校長先生以下4名の教員と5名の生徒たち（高1と高3の学齢）であった。

生徒5名全員は、本校生徒の家庭にホームステイした。日本語を勉強しているといっても、まだ年数は浅い。スマホの翻訳を頼りにして5日間を過ごしたようであった。

双方の生徒たちは、早速「LINEグループ」を作り、本校生の中には、事後にタイ語のテキストを買った者もいたようだ。既に、翌年タイに行くことを決めていたのである。

タイからの訪問団が本校にやって来たのは、中間テストの最終日。翌金曜には、各ホスト生徒とともに各学年の遠足に参加した。

土曜には、全員でマイクロバスに乗って鳴門・淡路島に一日旅行に出かけた。夜には歓迎会も開き、教員間の交流もできた。日曜だけは自由時間であったが、結局どの家庭でも外出し、忙しい日となったようだった。

火曜午前に関空から帰国する予定だったので、唯一月曜日だけ、終日本校にいたのであるが、普段から交流のある近隣学校園を訪問するなど、やはり忙しい日程となった。



5 全ての記録はウェブに

実は、来訪に先立つ7月下旬、私は私費で相手校を訪れた。それを含め、令和元年度の交流については、他の本校に関する諸事と同様、多数の写真とともに、全て本校サイト内に掲載している。

右のQRコードからぜひご覧いただきたい。



◀ 神戸北高キャラクターからとん

* MOU：了解覚書（Memorandum of Understanding）組織間の合意事項を記した文章のこと。

特集

興味・関心、学習意欲を高める理数教育の工夫

学校訪問

自立した子どもが育つ学校をめざして
～今日の日を大切に 明るく くじけず 元気よく～

県立こやの里特別支援学校

中堅教員等による随想

子どもたちと共に学び続ける教師をめざして

明石市立二見北小学校 教諭 すぎうら 杉浦 ゆきと 敬人 1

論文

興味・関心・学習意欲を高める理科教育の工夫

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授 かさほら 笠原 めぐみ 恵 4

教育実践

説明する喜びを生み出す理数教育
～三角ロジックに注目した説明活動の充実～

新温泉町立照来小学校 教諭 むらつ 村津 けいた 啓太 8

未来を拓く道具の入った「た・ま・て・ば・こ」
～課題対応能力を基盤とした、好奇心を高める理数教育の工夫～

姫路市立豊富小中学校 校長 やました 山下 まさみち 雅道 12

STEAM教育1年目の取組
～心のエンジン駆動プログラム～

県立加古川東高等学校 教諭 ふくさこ 福迫 のりひと 徳人 16

授業づくり

最初の一步！ アンプラグドでプログラミング的思考に親しもう

兵庫教育大学大学院 学校教育研究科 教授 もりやま 森山 じゅん 潤 24

グローバル化する社会への対応

いくつもの国境を飛び越えて学んだこと

兵庫県立大学 環境人間学部 教授 いぬい 乾 みき 美紀 26

実践報告

手作りのタイ王国との交流

県立神戸北高等学校 校長 ながさわ 長澤 かずや 和弥 30



ひょうご学力向上サポート事業〈平成30年度～令和2年度報告〉

テーマ1 「高度な知識を身につけ、大学への進学を実現する」
グループAの取組について

県立西宮高等学校 教諭 おかむら あきひこ
岡村 昭彦 32

テーマ1 「高度な知識を身につけ、大学への進学を実現する」
グループBの取組について

県立豊岡高等学校 教頭 たなか かずのり
田中 一範 33

働き方改革の実現をめざして

勤務時間の適正化に向けた取組から

多可町教育委員会 学校教育課 副課長 とどき とよかず
届木 豊和 34

連載講座

特別な教育的支援を必要とする児童生徒への指導（第89回）
「小・中学校における通級による指導の効果的な連携と支援体制の充実」
～通級指導担当教員・担任・保護者の三者連携～

丹波市教育委員会 指導主事 いとう けんじ
伊藤 憲司 37

研修最前線レポート

(中) 数学科授業力向上講座
～数学的に考える資質・能力の育成をめざした授業実践～

県立教育研修所 義務教育研修課 38

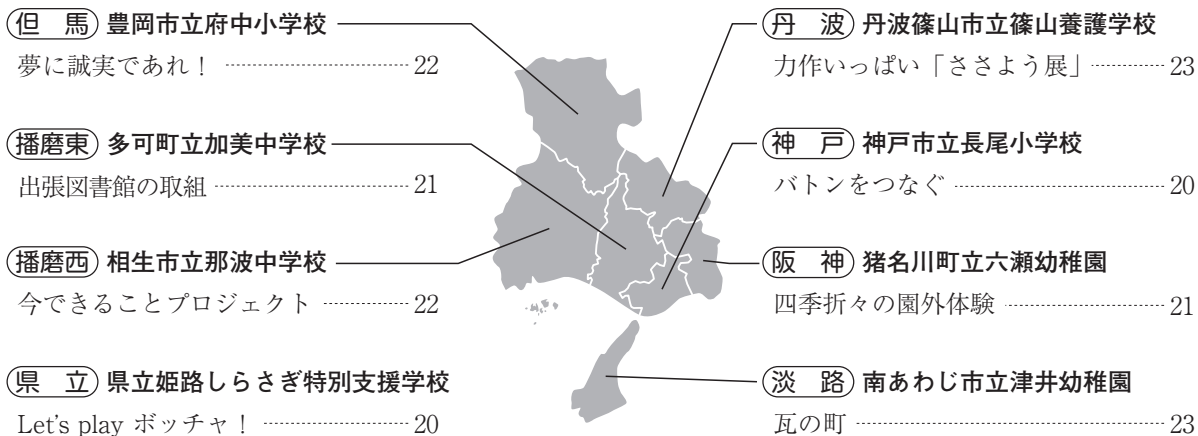
コラム「教育の接点」

がらくた

神戸新聞社特別編集委員兼論説顧問 はやし よしき
林 芳樹 40

編集後記

トピックス P20～23



兵庫が育む ころ豊かで自立する人づくり

兵庫教育

2月号
2021 No.840

特集

興味・関心、学習意欲を高める 理科教育の工夫

論文

興味・関心・学習意欲を高める理科教育の工夫（兵庫教育大学大学院 教授 笠原恵）

教育実践

各校の実践より（新温泉町立照来小学校、姫路市立豊富小中学校、県立加古川東高等学校）



芝生の感触を楽しみながらの校外での散歩 ～県立こやの里特別支援学校～



月刊「兵庫教育」

URL:<https://www.hyogo-c.ed.jp/~kenshu/>

発行：兵庫県教育委員会
編集：兵庫県立教育研修所